

こちら宇宙人特別居住区



プロローグ 1

「はあ はあ はあ」

もう疲れた。

もう走れない。

普段から運動なんてしていないんだ。

事務所から添門町のマンション？

走って行ける距離じゃねえだろ！

くそ、自転車さえ使えたら・・・。

なぜ自転車のサドルだけ盗む奴がいるんだらう。

いやがらせとしか思えない。

サドルなしで、立ちこぎしようかとも考えたが、うっかり座ってしまってお尻にダメージを負うのもつらい。

だから、走る事にしたのだが・・・。

俺は酸素不足で半分頭にモヤのかかった状態の中、そんなことをボンヤリ考えながら走り続けていた。

ようやく目的地にたどりついた俺は、両手を膝に置き、しばらくの間呼吸を整えた。

「到着した。このマンションの23階だったな。」

とこの場にいない相手に話しかけた。

「遅いブー。リナが怒ってるぞブー。」

俺の左耳に付けられた真っ黒のピアスから返事が聞こえた。

このピアスには、超小型の通信機と、小型カメラが内蔵されている。

通信担当は事務所のモニターから、こちらの様子が手に取るようにわかる仕組みになっているのだ。

「徒歩なんだからしょうがねえだろ。」

俺は30階はありそうなタワーマンションを見上げながらそう言った。

「とにかく急いでくれブー。もうすぐ・・・。」

「わかった。わかった。」

俺は通信係の話を遮って、マンションの中へ足を踏み入れた。

エレベーターはゆっくりと上昇を続けている。

俺は壁に背を預けて、エレベーターに付いている液晶テレビをぼんやりと見ていた。

ちょうど俺の好きなお笑い番組をやっている。

しかし高級マンションには、エレベーターにもテレビが付いているのか。

なんて贅沢な。

俺の家なんて、未だにブラウン管テレビだ。

しかもメーカー名はヒットラインだ。

聞いたこともないメーカーだ。

今度ここに来て、このソニー製液晶テレビと交換してやろうか。

そんなことを考えているうちに、エレベーターの、23の数字が黄色く光った。

プロローグ 2

「2303, だったな。」

エレベーターを降りると、俺は目的の部屋の番号をつぶやきながらゆっくりと歩いていった。その番号のついたドアを見つける。

俺は念のため、白いボタンダウンシャツの中に隠したレーザー銃を右手で確認した。

ドアを勢い良く開けると、いきなり何かが飛んできて、俺の顔面にヒットした。

固くしぼったタオルだった。

「遅い！」

奥にあるリビングで、流れる汗もそのままに、リナが俺を睨んでいた。

リナはやや茶色の長い髪の毛を後ろで結び、Tシャツに学校のジャージという姿で全身汗まみれだった。

濡れそぼったTシャツがリナの体に張り付き、豊かな胸を一層際だたせている。

俺は見てはいけないものを見てしまったように、リナから目を背けながら毒付いた。

「暑い……。なんだよこの暑さは……。異常だぞ。」

本当に暑かった。

今は秋ももうすぐ冬に変わろうとしている終秋である。

そして、湿度もすごかった。

まるでサウナに入ったようなねばっこい暑さである。

さっき走ってきたときも汗まではかかなかったのに、俺の首筋には、はやくもじっとりと汗が滲み出てきていた。

「しょうがないでしょ。ペダム星人は一定量の汗をかかないと出産できないんだから。」

リナの返事に俺はへいへいと適当に言葉を返した。

なんで汗をかかないと出産できないんだ———などとあえて質問はしない。

宇宙人の体質なんて、理由を聞いても無駄なのだ。

そういうもんなのだ、と思って行動するのが一番なのだ。

「早く、そのタオルで体拭くの手伝って！」

俺はリナに促されて、先ほど襲い掛かってきた絞りタオルを拾い上げると、リビングに入っ

ていった。リビングには、電気ストーブが5台と、加湿器が7台フル稼働していた。

暑いわけだ。

プロローグ 3

それらの設備に囲まれるようにして、ペダム星人がそこにいた。

パーマに失敗してアフロのようになっている頭が個性的ではあるが、見た目はその辺のおばさんだ。

そして、そのおばさんは、飲み過ぎてトイレにゲ○を吐こうとするサラリーマンのように、顔を床に向けて四つんばいという格好だった。

他には誰もいなかったのも、やはりこのおばさんが出産の最中らしい。

一応呼吸だけはそれらしく、ヒッフーフー、ヒッフーフーというラマーズ法をくり返していた。

俺のイメージする出産スタイルとは大分かけ離れていたが、俺はちゅうちょせずおばさんの顔を、ごしごしとタオルで拭いた。

宇宙人に対して、考えるだけ無駄だということは、今までの経験で痛いほど学んできたのだ。

リナはそのおばさんの首や腕等をかいがいしく拭いていた。

「もうすぐよ、もうすぐだからね……。」

と応援しながら。

「もういや、もういやよ。こんなにしんどいなんて……。」

おばさんは泣き言をくり返している。

四つんばいで汗をかいているだけなのに、何がしんどいのかよく分からなかったが、結局産みの苦しみなど、男には一生わからないものなのだ。

「何言っているの！お母さんになるんでしょ！」

リナは真剣な顔でペダム星人を叱咤している。

「でも、もう、耐えられない……私……。」

おばさんの涙がポタポタと床を濡らした。

「バカ！あの人がいなくても、わたし一人で立派な母親になるって……。あなたさっきそう言ってたじゃない！その言葉は嘘だったの？」

リナが大きな声で叫んでいる。

俺が来る前に、なにか重い打ち明け話があったようだ。

聞かなくてよかった。

重い話は苦手だ。

リナの言葉が届いたのか、ペダム星人はカッと目を見開くと、いきなり顔を真上に上げると、喉をかきむしり始めた。

「なにぼーっとしてるのよライ！喉をかくのをやめさせるのよ！」

リナに言われて、俺はペダム星人の腕を取り、喉から無理矢理引きはがした。

リナは一生懸命ペダム星人の背中をさすっている。

突然、ペダム星人の喉が大きく膨れあがった。

尋常な膨れ方ではない。

まるで風船が膨らむみたいに、ペダム星人の喉はちょうどそのアフロの頭くらいに膨張した

のだ。

プロローグ4

次の瞬間、ペダム星人はまるで噴水のように、緑色のネバネバした液体を一気に口から噴出させた。

「うお！」

思わず見上げると、緑色の液体の中に、大量の黄色い卵と一緒に飛び出していた。

このままでは、卵が床に落ちて割れてしまう！

そう思った俺は、せめて救える卵だけは救おうと、落ちてきた卵を受け止めようとした。

！

俺は仰向けの状態で、緑色の噴水を全身に浴びながらも、かなりの数の卵をキャッチしていた

。

両手に一つずつ、片足の足の甲あたりで一つ、お腹で一つ、そして口に一つ。

合計5つの卵を救った計算になる。

人間必死になれば、予想以上の力を発揮できるものだ。

口の中に緑色の苦い液体が入り込んで気持ち悪かったが、生命の重さには変えられない。

緑の噴水はすでに止まっていた。

俺は不自然な姿勢を維持しながら、大きな充実感に浸っていた。

リナはぐったりと横になっているペダム星人の汗を拭きながら、そんな俺をなぜか冷めた目で見ていた。

「あんた、何やってるの？」

なにって、卵が割れるのを防いだんじゃないか！

他の卵は今頃床に衝突して割れている・・・いや、全く割れていない。

床中に転がっている十数個の卵は、一つとして割れてはいなかった。

俺は右手でキャッチした卵の感触を確かめた。

グニグニ

卵は予想に反して柔らかく、ゴムのような弾力があった。

こんなたくましい卵なら、ここから地面に落としても割れることはないだろう。

リナのあきれんような視線が痛い。

そういえば、ペダム星人の卵はゴム質で割れにくく、中の幼虫は卵を溶かして外にでるのだと、養成所で習った気がする。

ほぼ試験は一夜漬けであったので、忘れていたのだ。

俺は体に乗っている卵を床に転がし、何事もなかったかのように立ち上がると、タオルで顔を拭いた。

「事案解決・・・。」

そして、俺は通信係に報告を行った。

俺の副業 1

2 俺の副業

俺は神貫ライ。

普通の公立学校に通う、高校2年生だが、ちょっとだけ変わった副業を持っている。

宇宙人特別居住区辰巳支部の、保安係だ。

地球の平和な方々は気づいていないが、実はかなりの数の宇宙人が、この地球上に訪れている

。

観光目的、亡命、移住等目的は様々だが、色々な星から、色々な宇宙人がこの辺境の星にやって来ているのだ。

地球に来た宇宙人は宇宙憲法第6条にのっとって、宇宙人管理局で登録を済ませ、地球に入ることができる。

ただし、宇宙人は地球上どこでも好きなところに行けるわけではない。

観光にしる、居住にしる、決められた場所にしか行くことができない。

地球人の精神レベルが現段階では基準以下のため、宇宙人の公表はできず、宇宙人の存在は秘密にしなければならないからだ。

そのため、宇宙人の所在把握を確実に行えるように、宇宙人の行動範囲を限定しているのだ。

そして宇宙人が住むことができる場所、それが宇宙人特別居住区である。

日本には、87の居住区が定められ、俺が担当しているのがJ-52地区である。

居住区は基本的に市単位で設定されているので、この辰巳市全域に、宇宙人が生活していることになる。

詳しい数や種類は知らない。

辰巳市は、そこそこの都会ではあるので人口も多く、多くの宇宙人が隠れて暮らしているんじゃないだろうか。

おそらくリナやポロあたりは把握しているのであろうが、なにしろ俺はあまり興味がないのだ

。

「ただいま〜。」

俺は事務所兼自宅に戻ると、頭からかぶった緑色の羊水？を洗い流そうと風呂場のドアを開けた。

ガコン

いきなり飛んできた体重計が、俺の顔面にヒットした。

目から火花が飛び散り、俺は顔を抑えてうずくまった。

「変態！」

というリナの声がして、ドアが乱暴に閉められる。

そういえば、リナは軽薄にも俺を置き去りにして、自分は自転車で颯爽と先に帰っていたのだった。

鍵閉めとけよ・・・。

てゆうか，人に体重計投げるか普通・・・。

俺は額が陥没してないか指で確認した後，仕方がないので通信系の待つ事務室へと向かったのだった。

俺の副業 2

「おつかれブー。」

事務室に向かうと、おおきなハンバーガーを頬張りながら通信係のポロがねぎらいの言葉をかけてきた。

大きな鼻にくるくるとよく動く小さな目。

子供くらいの背で、一応二足歩行だが、ブタにそっくりな宇宙人である。

ボーダーのつなぎのような服をいつも来ており、お尻の部分に開いた穴からくるんとカールしたピンク色のしっぽを出していた。

ポロの種族であるブー星人は、かなり古くから地球に住み着いており、高い知能と穏和な性質から、宇宙局と宇宙人との橋渡し役を兼ねて特別居住区の通信係をしている者が多い。

ただし、かなりの大食漢で、食費が相当かかることが玉にキズである。

ポロも例外ではなく、一日5食、更にその間にも間食をするなど、常に食べているといっても言い過ぎではない。

さらには語尾にブーをつけてしゃべるとところなど、こんなに豚の要素満載なのに、ブタと呼ばれると激怒するのだから宇宙人というのはやはりよくわからない。

「しかしすごい匂いだブー。食欲がなくなるブー。」

ポロは俺のネバネバした液体まみれの格好を見ながら悪態をついた。

「おまえが今まで食欲なくすことがあったか？一度見てみたいもんだぜ。」

ポロにそう言い返ししながら俺は冷蔵庫を開け、よく冷えたペットボトルのミネラルウォーターをぐくぐく飲んだ。

先ほどの事案で汗をかきまくり、からだ全体が乾いていたので、その水は震えるほどにうまかった。

「くは～～～！生き返るぜ～！！」

俺は一息で一本丸々飲み干すと、しみじみとそう言った。

「のぞき魔さーん、お風呂上がったから次入ればー？」

リナが事務所に入りながら声をかけてきた。

「誰がのぞき魔だこの暴力女！次から鍵かけとけー！！」

俺は大声で言い返ししながら風呂場に向かったのだった。

俺たち3人は、宇宙管理局が買い取った、元空き家で暮らしている。

3人とも管理局から派遣されてやってきたので、こちらに家もないからだ。

緊急事態に対応するために、3人一緒に暮らしているのだが、もっと良いところに住めないものだろうかといつも思う。

築30年は経過している2階建の家は、改造してあるモニター室以外はどこからどう見ても地味な普通の民家であった。

あまり目立つ生活をしてはならないということらしいのだが、もう少し良い家にしてくれても良かったんじゃないか……。

俺はガタガタときしむ風呂場の仕切りを力一杯開けながらそう思ったのだった。

俺の副業3

ようやく食べられるようになってきたポロの手料理（以前は大分宇宙的な味であった。）を食べながら、俺はリナとポロの会話を聞くこともなく聞いていた。

「ああ・・・やっぱり命の誕生の瞬間って感動よね・・・。」

リナはうっとり目を輝かせている。

さっきの宇宙人の話だろう。

「ペダム星人は出産の前に自分の星に帰るものだから、今日は貴重な体験だったかもしれないブー。」

「そうなんだ～。そう言えば予定日より也大分早いって言ってたかも。卵達、無事孵るかな～？」

「地球の環境に合えばいいんだけどなブー。あまり事例がないからわからないブー。」

「アスラ星人とは違うのかな？確か卵を地球で孵化させてるよね？」

「地球にアスラ星と同じ成分の栄養がたまたまあったからだブー。」

「でもペダム星とアスラ星ってたしか同じ銀河系だよ、だったら可能性あるかも。」

「そうだったかブー。リナはなかなか物知りだブー。」

「ごちそうさま・・・。」

俺はそう言って、食器を流しに運んでいった。

二人の話が退屈でたまらなかったからだ。

二人は無言のまま、僕をぼんやりと眺めていた。

気づかないふりをしてリビングを出ようとする俺に、リナが声をかけた。

「ライ、あんたもっと宇宙人のこと勉強しなさいよ！いざというとき困るわよ。今日だって・・・」

「わるい、興味ないんだ。」

俺はリナの言葉を遮るようにして言った。

「興味ないって何よ！バカ！」

リナの投げたフォークが俺のお尻に刺さった。

「いってえええええ！！」

俺はフォークがお尻に刺さったまま階段を駆け上り、自分の部屋へ避難したのだった。

俺の副業4

「う！」

俺はお尻からフォークを慎重に引き抜くと、ベッドに倒れ込んだ。

「ほんとに何でも投げるなあいつは・・・。」

俺はぼんやりとつぶやくと、仰向けに寝そべって、フォークをぼんやり見つめた。

リナ的情熱には、ホントについていけねえよ・・・。

俺はそんなことを再び考えていた。

リナはスラリとした手足に大きなバスト、モデルのような小さな顔と絵に描いたような美少女で、おまけに才女であった。

養成所での成績は一番。

学問、体術なんでも万能であり、何よりこの仕事を誰よりも愛していた。

宇宙局立養成所の入学方法は、もちろん一般公募できるものではないので、誰かの推薦か、養成所のスカウトによるかのどちらかである。

リナはスカウト組であった。

小学校時代、空手の全国大会で優勝したことや、その他秘密裏に行われた身辺調査等の結果、養成所からスカウトを受けたらしい。

養成所を卒業してからも、リナは宇宙人への学習、肉体の鍛錬等、この仕事のための努力を欠かしたことがなかった。

本当にこの仕事が楽しくてしょうがないのだろう。

俺はそんなリナを眩しく思いながらも、少し、いやかなり重荷に感じていたのだった。

俺はこの仕事が嫌いであった。

嫌いというか、全く興味が持てないのだ。

決して自慢ではないが、俺の父親は宇宙局のかなり上の地位におり、父親はいやがる俺を無理矢理養成所に入学させたのだった。

こんな素晴らしい仕事を是非息子にも味わってもらいたい。

そんな理由らしいが、自己満足もいいところだ。

仕事なんて、要は合うか合わないかである。

同じ仕事でも、本人が気に入れば天職だし、気に入らなければ苦痛でしかないのだ。

父親はいい歳をして、そんなこともわからないのだ。

おそらく挫折をしたことがない人間なのだろう。

俺はブラウン管のテレビをつけ、だらだらと見続けながら、いつの間にか眠りについてた。

「ライ～？いい加減起きないと遅刻するわよ？先行くからね～。」

ドア越しのリナの声で目を覚まし、俺はぼんやりと時計を見て仰天した。

遅刻ギリギリの時間じゃないか！

急いで制服に着替えると、朝ご飯も食べずに家を飛び出した。

俺とリナは、中学生の3年間寮に入り、普通の学校で習う勉強もこなしながら、養成所で過酷

な訓練を受け（ホントに死ぬかと思った。），普通に今の辰巳市立岩魚城高等学校を受験して入学した。

もちろん養成所出身ということは生徒はおろか，学校にも隠してある。

俺たちは，ごく普通の，高校生ということになっているのだった。